

令和7年度 とうきょう すくわくプログラム 活動報告書

年間テーマ	自分の体、自由に動かせるかな？
園名	台東区立富士幼稚園
所在地	台東区浅草4-48-18
時期	5歳児 4月～3月

1. 活動のテーマ

自分の体、自由に動かせるかな？

<テーマの設定理由>

子供たちの運動量が減り運動できる環境も減っている中、積極的に自分の体を動かすことを推進していきたい。現在「自分がどんな動きができるのか」「挑戦してみたらもっと向上することは何か」など、子供たち自身が試したり挑戦したりする活動を進めたい。

2. 活動スケジュール

○年間を通じて巧技台などの運動遊具を用い、自由な遊びの中で一人一人がじっくりと取り組める環境づくりをしていく。そこで実際に挑戦している姿を認め、一人一人が感じたことを聞き取っていく。
○一斉活動の中で、動きの楽しさを味わえるよう講師を招聘して教わる機会を作る。

3. 活動のために準備した素材や道具(・)、環境の設定(※)

・巧技台、はしご、一本橋、ジョイント式の平均台、マットなど
※チャレンジカード(5歳児)運動遊びの各項目に挑戦するごとにスタンプを押し、達成感や次への意欲につなげる。
※遊具は常に自分たちで出して組み合わせていかれるようにする。年間を通じて安全な扱い方を知らせる。

4-1 探究活動の実績

<活動の内容>

- ・自由な遊びの中で、体を動かす環境を子どもたちが自発的に作って、そこで個々に挑戦する。
- ・自分なりにめあてをもちながら様々な運動遊びに取り組む。
- ・学級全体で友達と楽しんだ動きを、自由な遊びの中で再現しながら動いていく。

＜活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり＞

5歳児の男児4名が室内で走り回る姿が見られた。少人数でも思い切り体を動かしながらルールのある遊びを楽しめるように、遊戯室にビニールテープで窓枠のような4つの区切り（一辺2m程度）をつくる。ルール（鬼は線上のみ通れる。逃げる人は線を踏まないように枠の中を行ったり来たりして逃げる。）を知らせ、1回目は教師が鬼になり、その後鬼を交代しながら繰り返し楽しむ。遊んでいく中で、この鬼遊びの名前をどうするか教師が問いかけると、線のかたちから「ばってん鬼」にしようと話し合った。

学級の集まりで、ばってん鬼を楽しんだことを共有する中で、経験していない友達にルールを知らせたり、実際に体を動かしながら上手い避け方を伝えようとしていた姿が見られた。

翌日以降は「ばってん鬼しよう！」と自分たちで声を掛け合って遊び出す姿が見られた。

5歳児が好きな遊びの中で、裸足になってベッタンマットやビニール素材のでこぼこ山を組み合わせて楽しむ姿があった。裸足になって、より様々な感触や刺激を楽しめるように、教師は凹凸をつくるための素材（ビー玉、様々な大きさのテープ芯、ラップ芯、ペットボトルキャップ、梵天）とそれをくっつけるためのジョイントマットを提示した。友達と力を合わせて素材をくっつけたり、「ここにもつけてみる？」「こっちの方が痛いよ」などとやりとりをしたりして作ることを楽しむ。

自分たちで作った裸足になって渡っていくマットを「はだしコース」と名付け、翌日以降もマットの組み合わせを変えながら友達と一緒に楽しむ姿が見られた。



5-1 振り返り

- ・少人数学級では、ルールのある鬼遊びを好きな遊びの中で楽しむことが難しく、異学年と合同で楽しむことがある。今後も、異学年との鬼遊びだけでなく、横のつながりも深められる運動遊びを取り入れていきたい。
- ・はだしコースでは、自分たちで足の感触を試しながら素材を選び、作ることを楽しんだ。またジョイントマットにすることでその時によって組み合わせを変えられるため、自分たちで工夫しながら楽しむことができた。

4-2 探究活動の実績

<活動の内容>

- ・自由な遊びの中で、体を動かす環境を子どもたちが自発的に作り、そこで個々に挑戦する。
- ・自分なりにめあてをもちながら様々な運動遊びに取り組む。
- ・学級全体で友達と楽しんだ動きを、自由な遊びの中で再現しながら動く。

<活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

様々な運動遊具に触れながら、身体を動かして遊ぶことを楽しめるように、室内に鉄棒、雲梯、短縄（4歳児～）、バランスペダルを設定した。初めは、目新しい遊具に全員が喜んで関わる姿が見られた。その後、できるまで繰り返し取り組む姿、数回挑戦して諦める姿、速さや回数をより増やそうと取り組む姿、友達の様子を見て応援する姿など、それぞれの関わり方が見られた。そこで、チャレンジカードを用意し、取り組みへの意欲や達成感につながるようにした。苦手感から関わりが薄かった遊具にも自分から取り組もうとしたり、友達に教えてもらったりする姿にもつながった。また、教師が鉄棒の姿を撮影し、学級でオリジナルの「鉄棒図鑑」をつくと、自分なりに技に名前をつけて様々な動きに挑戦する姿が見られた。

繰り返し様々な運動遊具と関わる中で自信が付き、運動会でも取り組みを保護者の方々に見てもらうことになると、より力が湧いて本番に向けて一生懸命取り組む姿が見られた。

バランスペダル道場→
(順番待ちの椅子は自分たち
で必要感に気付いて準備)



縄跳び図鑑を開いて跳び方を研究する姿↓



新しいゲームとして、“紙コップ競争”（2色の紙コップをそれぞれ均等に並べる。「よいスタート」の合図で、一つずつフープの中に紙コップを積んでいく。紙コップを積む順番は自由だが、運ぶのは必ず一つずつ。）を一斉活動の中に取り入れる。友達の様子を見たり、実際にやってみたりする中で、足が速ければ勝てる訳ではなく、急げば勝てる訳でもなく、どの順番で紙コップを積みめば良いか考えたり、足をどのように動かせばよいか繰り返しの中で感覚をつかんだりして、自分なりに戦略を立てることが勝つために必要だと気付く。「次〇〇とやりたい！」と様々な相手と競争することを繰り返し楽しみ、応援も白熱した。



一斉活動で楽しんだ後、必要なものを保育室に置いておき、紙コップを並べる位置にビニールテープでししをつけておくと、自分たちで準備をして繰り返し楽しむ姿が見られた。

紙コップ競争の他に、フープくぐり競争（均等に並んだフープを下から服を脱ぐように体をくぐらせ、最終地点のコーンに掛ける。一つずつ掛け、全てのフープを掛け終わってスタート地点に先に戻った方が勝ち）も新しいゲームとして学級で取り入れた。応援側もハラハラしながら大声で応援し、初めは一对一の勝負だったが、次第に色ごとにチームとして通算で勝敗を決める姿が見られるようになった。

5-2 振り返り

- ・様々な運動遊具が設定されていることで、自分から挑戦してみたり、友達の様子に刺激を受けたりして、自分なりにめあてをもちながら取り組む姿が見られた。引き続き、それぞれの挑戦を認めていながら、体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるようにしていく。
- ・年長児になると、ただ体を動かすことを楽しむだけでなく、どのように動いたら勝てるか、体をどう使ったらより速く動けるかなど、繰り返し試したり考えたりしながら動く遊びにより楽しさを感じるようである。3学期も様々なルールのある遊びを工夫して取り入れていきたい。

令和7年度 とうきょう すくわくプログラム 活動報告書

年間テーマ	自分の体、自由に動かせるかな？
園名	台東区立富士幼稚園
所在地	台東区浅草4-48-18
時期	4歳児 4月～3月

1. 活動のテーマ

自分の体、自由に動かせるかな？

<テーマの設定理由>

子供たちの運動量が減り運動できる環境も減っている中、積極的に自分の体を動かすことを推進していきたい。現在「自分がどんな動きができるのか」「挑戦してみたらもっと向上することは何か」など、子供たち自身が試したり挑戦したりする活動を進めたい。

2. 活動スケジュール

年間を通じて巧技台などの運動遊具を用い、自由な遊びの中で一人一人がじっくりと取り組める環境づくりをしていく。そこで実際に挑戦している姿を認め、一人一人が体を動かす楽しさを感じられるようにしていく。

3. 活動のために準備した素材や道具(・)、環境の設定(※)

- ・巧技台、はしご、一本橋、ウレタンの平均台、トランポリン、ジャンボマット、など
- ※教師がモデルとなって運動遊びの環境設定をしていく中で、幼児が遊具の使い方を知り、自分たちで出して組み合わせながら遊べるようにする。年間を通じて安全な扱い方を知らせる。
- ※足裏の感覚を鍛える活動を取り入れるため、身近な材料（様々な形や硬さのもの）をつけたマットを用意。

4-1. 探究活動の実績

<活動の内容>

- ・自由な遊びの中で、体を動かす環境を子どもたちが自発的に作って、そこで個々に挑戦する。
- ・学級全体で、友達と一緒に楽しみながら、運動遊びを行う。また、学級で友達と楽しんだ動きを、自由な遊びの中で再現しながら動く。

＜活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり＞

教師が巧技台で階段を作り始めると、「滑り台もあるといいな」、「はしごもつけてほしい」など今までの経験で楽しかった遊具を出してほしいと教師に伝えたり、「これもあるといいんじゃない？」と自分で運べる運動遊具を運び入れたりするなど場づくりが進む。日によって公園、ジム、遊園地、忍者の修行場などイメージをもって高さや組み合わせは幼児と相談しながら作り進めていく。

自分なりに動いたり友達の動きを真似たりする中で様々な動きを試す。「先生見ててね、次は遠くまで飛ばよ」「高いところから行くの、難しいんだよ」など、言葉に出しながら、自分の動きを調整したり、遊具を組み替えたりしながら繰り返し楽しんでいる。



- ① 片付けの際、マットを持って運ぶときに、大人数で「わっしょい」と言いながら神輿のように運ぶことが多い。今回マットが多く少人数に分かれて持ち運ぶことになり、担任が持ち方を実況していると「先生見て、こうやって持ってみたよ」と両端をもって二人でバランスをとって運ぶ姿や頭の上に担いで3人で持つなど様々な“持ち運ぶ”姿が見られた。
- ② トイレまでの道では“〇〇修行”と様々な動きを引き出し経験ができるように考え声を掛けている。ハイハイがぎこちない幼児、両足飛びが苦手な幼児など実態がよく分かる。繰り返し楽しみながらやっていると、「帰り道は後ろ向きでいってみよう」と幼児から新たな動きを試し動く姿も見られている。

①



②



振り返り

- ・同じ環境でも、繰り返し楽しみながら遊ぶことで子どもたちが新たな目当てをもって動くことを楽しんでいった。友達の動きから刺激を受けたり教師の声掛けから気付いたりするなど「今度はこうしてみよう」「こんなことができた」と運動遊びの意欲につながっている。
- ・高さを変えたり、多数の遊具を構成したりして場を作ることで様々な動きを引き出すことができ多様な動きができた。声掛けや環境の工夫で様々な動きのレパートリーやバリエーションを引き出すことができることを実感した。

4-2. 探究活動の実績

<活動の内容>

- ・自由な遊びの中で、体を動かす環境を子どもたちが自発的に作って、そこで個々に挑戦する。
- ・学級全体で、友達と一緒に楽しみながら、運動遊びを行う。また、学級で友達と楽しんだ動きを、自由な遊びの中で再現しながら動く。

<活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

運動会のダンスでは、曲や手具など、教師から提案して始めたが、出てくる動きに対し、「波！、花火みたい！、流れ星～！」など動きに言葉をつけながら皆で踊ることを楽しんでいた。繰り返し行う中で、友達同士で持っている手具を集めて表現する姿が出てくる。教師はそれを見て「花束みたい、きれいだね」と声を掛けると「花束いいね！ やりたい！」とダンスに取り入れ楽しむ姿につながった。曲中に出てくる掛け声や動きを友達と合わせて行ったり、自分なりに動きを出したりするなど様々な楽しさを味わった。

運動会後にはダンスを年少児に教えたり、リレーや雲梯を年長児から教わったりと異年齢の交流が盛んになり、経験したことを伝える姿、新しい活動へ取り組む姿等、運動遊びを通して経験が広がっていった。



2 学期には様々な講師の先生を招き運動遊びをする機会があった。ボールを使った運動遊び、体を使った表現遊び、プールや縄など季節や興味関心に合わせた題材での運動遊びの実施だった。様々な動き、今まで経験のなかった動きなど、先生方と一緒に楽しみながら行えたこともあり、次の日の遊びや似た動きが出てくると「これ教えてもらったよね、できるから見てて」など自分たちで思い起こし動きを楽しむ姿が見られた。



振り返り

- ・体を動かして遊ぶことが好きな幼児が多いため、運動会の活動を通してさらに意欲的に運動遊びを楽しむようになった。経験の中で多様な動き、友達と力を合わせる協調的な動き、自分の体をコントロールする調整力が伸びたと感じる。また、年長児の姿から刺激を受けチャレンジしてみようと自分から取り組む姿も育ちの一つである。
- ・経験した動きを他の場面や遊びで活かす幼児、繰り返し楽しむ幼児が多い。継続して楽しんだり親しんだりできるような環境を構成していきたい。

令和7年度 とうきょう すくわくプログラム 活動報告書

年間テーマ	自分の体、自由に動かせるかな？
園名	台東区立富士幼稚園
所在地	台東区浅草4-48-18
時期	3歳児 4～3月

1. 活動のテーマ

自分の体、自由に動かせるかな？

<テーマの設定理由>

子供たちの運動量が減り運動できる環境も減っている中、積極的に自分の体を動かすことを推進していきたい。現在「自分がどんな動きができるのか」「挑戦してみたらもっと向上することは何か」など、子供たち自身が試したり挑戦したりする活動を進めたい。

2. 活動スケジュール

〇年間を通じて巧技台などの運動遊具を用い、自由な遊びの中で一人一人がじっくりと取り組める環境づくりをしていく。そこで実際に挑戦している姿を認め、一人一人が体を動かす楽しさを感じられるようにしていく。

3. 活動のために準備した素材や道具(・)、環境の設定(※)

- ・巧技台、はしご、一本橋、ウレタンの平均台、トランポリン、ジャンボマット、など
- ※教師が運動遊びの環境の場として、提供していく中で、遊具の使い方を知り、自分たちで出して組み合わせたいかできるようにする。年間を通じて安全な扱い方を知らせる。
- ※いろいろな素材のものを使用するなど工夫していく。

4-1. 探究活動の実績

<活動の内容>

- ・好きな遊びの中で、教師が環境として提供している遊びの場を使用して、個々に挑戦する。
- ・教師が提供している場を自発的に、さらに大きく変形させたり、ほかの遊具を付け加えながらさらに楽しくなるように変化させていく
- ・学級全体で友達と楽しんだ動きを、自由な遊びの中で再現しながら動いていく。
- ・学級全体で、友達と一緒に楽しみながら、運動遊びを行う。

〈活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり〉

教師が好きな遊びの中で、ジャンボマットで山を作ると、「わーいお山ができた。登ってみよう」と登り始める。始めはその場にいた数名が登って遊んでいたが、保育室に帰ってきた子供たちがどんどん上り始める。近くにいた友達が、滑り落ちそうになると、手を出し「つかまって」と一緒に登ることを楽しんでいた。

何度も繰り返し下から登り、頂上に着くと、また滑り降りることを楽しんでいた。

別の日、ジャンボマットの滑り台ではなく、折りたたんだまま床に置くことで大きな山が出来上がった。3歳児の身長では、ジャンプするだけでは登れず、端のつなぎ目を掴んで登ったり、半分のところのミシン目に足をかけるなど、その子なりの登り方を工夫して挑戦している。しかし何度も挑戦しているが、登れず困っている幼児の手を数名の幼児が、上から手を引っ張り、登らせようとしている。それでもなかなか登れず、再度挑戦していると、自分ですぐに登れた幼児を見て、教師が「登れたねー」と声をかけながら拍手をすると、そこにいた幼児、みんなが拍手をしてくれた。その幼児は今では、簡単に登れるようになっている。



2人の幼児が、かたかたやま、ちくちくやま、とびとびやまを誰もいない遊戯室でそつと並べ始めている。4, 5歳が遊戯室で遊んでいる姿を見ているので、使い方はわかっているようだ。塩化ビニールのような素材でできている半円形にとげとげがついているものに、裸足で乗ってみようとしている。肉まんの大きいサイズのようなものなので、上に乗るとバランスを取らなければならない。

足の下感覚を確かめるようにそおと乗ってみるとうまく乗ることができた。にこつと微笑むと、もう一つ並べて、また並べてと次々と並べて、いよいよ全部が並べ終わった。端から一つずつ両足で乗っていき、床に落ちないように上手に渡っている。そこへ教師がやってきて、「すごい山がたくさん並んでいるね。渡れるの」と聞くと、得意げにわたり始めた。「すごいね、落ちないんだね。」と認めると次は、両足だけでなく片足でも次々と渡り始めている。山は、とげとげしていたり、ちくちくしていたり、平らだったりいろいろだったが、その足の下感覚を確かめるように慎重に何度も繰り返し渡ることを楽しんでいた。

振り返り



- ・初めての遊具で、使い方がわからないが、教師と一緒に設定することで、もっとこんな風になりたいの気持ちが増えて、さらに楽しみにつながっている。
- ・同じ環境でも、繰り返し関わることで子どもたちが自分の目当てを更新していた。教師の声掛けにより「今度はこうしてみよう」「こんなことができた」という意欲につながることを実感した。
- ・多数の遊具、素材を構成したりして場を作ることで、よじ登る体の動きや体のバランスをとるなどの様々な動きを引き出すことができ多様な動きができた。

4-2. 探究活動の実績

<活動の内容>

- ・好きな遊びの中で、教師が環境として提供している遊びの場だけでなく、自分たちで使用したことがある遊具を使用して場を作り遊ぶ姿を認めていくようにした。
- ・好きな遊びの中で何度も楽しんでいる運動遊具を運動会の競技にすることでさらに楽しめるようにする。
- ・学級全体で友達と楽しんだ動きを、自由な遊びの中で再現しながら動いていく。
- ・学級全体で、友達と一緒に楽しみながら、運動遊びを行う。

<活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

好きな遊びの中で、園にある運動遊具を並べて、場を作り始めた。長い橋ができると渡り始めている。教師が「すごいね、こんなに長い橋が渡れるんだ」と声をかけると、「もっとできるよ」とさらに違う運動遊具を持ち出し、場を広げ始める。友達同士で「これも出そう」「こっちもあるよ」とどんどん広がっていく。さらに教師が「すごいね、このくっついていない遊具はどうやって渡るの」と聞いてみると、「こうやるんだよ」と渡って見せてくれる。そこへ数名の幼児が遊んでいるところを見つけて、「やってもいい」と声をかける。作っていた幼児は嬉しそうに「いいよ」と答えた。そこで、ちょうど片付けの時間になってので、片付けを知らせると、「みんなにも橋で遊んでほしい」と声が出る。それを聞き、教師はみんなで片付けをした後に、遊戯室で幼児が作った橋で遊ぶ提案をすると、幼児たちは納得して、お部屋の片づけを一緒に行った。その後学級全体で遊戯室の橋で遊んだ。この遊びはこれから数日繰り返し遊ぶことを繰り返していた。



運動会で5歳が挑戦した雲梯をやってみたいと思っていた雪組。運動会后やってみようとする。公園などで経験がある幼児は、軽々と渡り切れる幼児もいれば、ぶら下がるだけでも精いっぱい幼児もいる。軽々と渡る幼児を見て、自分もやってみたいと何度も挑戦して、渡れるようになった幼児は、「できたよ」と大いに興奮して喜びを表現していた。

そこからしばらくして、二人の幼児が「変わり身の術をするから見てね」と教師を呼んでいる。何をするかと見ていると、二人で並んで同時に雲梯を渡り始めた。二つぐらい進んだところで、一人の幼児がもう一人の幼児の前に来るように斜めに進み、もう一人の幼児も斜めに進み始めると、お互いに始めに進み始めた場所とは逆の場所に同時に到着した。「すごいね。変わっちゃった。」と教師が大いに認めると、とても嬉しそうに「もう1回やろう」とお互いに手を取りながら繰り返し楽しんでいった。



振り返り

- 雪組の中で、誰かがやっていたことをまねしたり、もっとこんな風になりたい、やってみたいの気持ちが増えて、さらに楽しみにつながっている。
- 同じ環境の中でも、繰り返し関わることで、子供たちは「自分でやってみよう」とする姿が見られるようになる。その姿を教師や周囲の子供が認めることで、「自分もやってみたい」「一緒にやりたい」「またやってほしい」という気持ちへと広がっていくと感じた。さらに教師がその姿を意識して認めていくことで、子供同士のつながりが生まれ、お互いを認め合おうとする意識や行動へとつながっていくように感じた。
- はじめは怖がっていたスクーターやジャンプ、はしごや鉄棒渡りなども、回を重ねるたびに恐怖心もなくなり、挑戦する気持ちが増えていっている。始めは手を使って四つん這いになり渡って行っていたものも、足だけで渡れるようになり、渡る場所も考えながら、上手に体を使うことができるようになってきている。
- 多数の遊具を構成したりして場を作ることで、様々な動きを引き出すことができ多様な動きができた。

